「こどもまんなか」を問う 1

この国はこどもを守る意志を本当に持っているのだろうか？こどもを守る強固とした意志を感じることができない。

こどもを傷つける社会であってはいけないと思う。現在は誰がいじめ被害に遭っても不思議でない時代であり、その時本当に守れるのか? 誰が学校に行けなくなっても不思議でない時代であり、その時本当に守れるのか？

それが担保されていないところでこどもと過ごすことに不安を感じるのは当然である。

今までは「学校に行っていれば安心だ」だったが、そういう時代はもうとっくに終わっている。

どうしてこれほどまでに、こどもを守ろうとする社会にできなかったのだろうか？

こども若者たちの自殺が増えている。中学校卒業後の非就学非就業のこども若者たちが増えている。学校や社会を拒絶するこども若者たちが増えている。

この状況は異常と感じざるを得ないのだが、こどもを守ろうと立ち上がってこなかったことが一層異常に思えて仕方がない。

「こどもまんなか」を問う 2

昨年 11 月に亡くなられた谷川俊太郎さんの「こどもたちの遺言」を読み返している。

その中で、谷川さんは、『生まれたよ　ぼく』では「ここがどんなにすばらしいところか　邪魔しないでください。」、『いや』では「いやだ と言っていいですか。」とうたっている。

こどもの意見表明について、こどもに対する尊厳について問いかけている。まさにこどもアドボケイトを体現していると思えてならない。

谷川さんは、こどもたちはある意味大人より鋭く、豊かであり、一人の他者として子どもを認めてきたのではないか、自分の中にある子どもを出すことによって子どもとのつながりを持とうと考えてきたのではないか、と思う。

こどもにこそ人間の本質がひめられているのであり、こどもたちが既成の学校に魅力を感じなくなっているのは、自分たちのこども性が尊重されず壊されていくことに気づいてきたからではないかと考える。

「こどもまんなか」を問う 3

「姿を隠していく若者たち」

私は学校に行けないこどもたちやひきこもっている若者たち、いわゆる制度の狭間にいらっしゃる方々への支援活動を続けている中で、最近とても心配なことがあります。

それは、中学校卒業後あるいは高等学校中退後にどこにもつながっていない若者たちが増えていることです。

彼らは進学したり、就業したいのであるが、そこにはさまざまな壁があり、あきらめてしまうしかない状況になっているのです。

良かれと築き上げられてきた社会ではあるが、それはどこまでも不完全な社会であり、生きづらさを抱える人たちがいらっしゃることを忘れてはならないと思います。

彼らが夢や希望を持ち続けるためには、私たちにできることは何なのかを自問する日々です。

社会の生きづらさに一番直面しているのは彼らですが、今までは彼ら当事者抜きで討議し制度を作ってきたんだと思います。

今こそ彼らが思いを直接発信する場を保証することが最も求められているのではないでしょうか。

「こどもまんなか」を問う 4

高等学校再編に一言

高等学校再編についての議論が続いている。

行政の考え方、地元の考え方が交錯している。富山県の将来に影響を与える重要な施策である。

今の議論に当事者たちの意見が反映されているのだろうか。当事者とは、県内在住で広域通信制高等学校に通っている生徒たちのことだ。

現在、在籍は他県になるが、相当数の県内の高校生が広域通信制高等学校に所属して通っている。彼らが県内の高等学校を選ばないで、広域通信制高等学校を選ぶようになった背景こそが、今の高等学校再編の鍵になると考える。

また、それは小中学校での教育の在り方にも及ぶテーマとなるだろう。

要するに、高等学校再編は高等学校のみの課題ではないのである。富山県が教育に関していかなる考え方を持っているかが問われているのである。

高等学校再編は、対処療法で対応するのではなく、根本療法で対応していくことが求められていて、それが「こどもまんなか社会」を実現していく処方箋となっていくと考える。

「こどもまんなか」を問う 5

不登校は多いのか

毎年 10 月に文部科学省から発表される不登校の子どもの数が増加していることが報道されます。

不登校の数が確かに増加はしており、昨年より増加したとか過去最多とか報道されますが、それはあくまで比較しているだけのことではないでしょうか。

現在の学校や家庭、社会の状況からすると、今の数は多いのでしょうか、それともまだ少ないのかもしれません。

不登校が多いから、不登校特例校や学校内フリースクールを作るのではなく、多様化するこどもたちに対応するために、整備するのではないでしょうか。だから、不登校特例校は、今は多様な学び学校と呼ばれるようになりました。

本来の趣旨は、こどもたちの意志を尊重して、彼らが持つ権利が守られて、最善の利益が保障されるために相応しい環境を整えるということだと考えます。

「こどもまんなか」を問う 6

フリースクールでの学び

フリースクールは、学校外の教育施設として、安全安心な居場所並びに多様な学びの実践拠点である。また、子どもたちの権利擁護と意志尊重を第一としている、まさしく「こどもまんなか」そのものである。こどもに委ねられることを、大人が勝手に決めないことが大切だと考える。

子どもの権利という概念の先駆者であるコルチャック氏が訴えた「子どもはすでに人間である」ということを根底に、自由でわくにはまらない環境を作り、新しい学びの場を提示している。

学校に行けないことをネガティブにとらえる時代はもう終わった。彼らは明るく心豊かな感性に満ちたこどもたちであり、私は誇りに思っている。

多様な学びとは、こどもたちのすべてを受け入れることで個々の可能性が自由に表出されていくことであり、こどもたち同士が自ら育つ意志を共に一緒に育み合うことである。

これからのフリースクールは、当事者から社会的な理解への広がりが課題だと考える。

「こどもまんなか」を問う 7

不登校は問題行動ではない

2016 年は不登校にとって歴史的な一年だった。その年の 12 月に教育機会確保法が制定され、第 13 条で「休養の必要性」が認められた。また 9 月には文部科学省は「不登校を問題行動と判断してはならない」いう通知を出した。

不登校が問題行動ではないのであれば、増加したとか、減さなければならないという議論は全く意味のないものである。辛い時に休むことは当たり前のことであり、そんな中を無理に行かせたり、またいじめが横行し、生命の危険があるところに行かせること自体が問題であると考える。

不登校状態の子どもが増加しても問題ではなく、そうならざるを得ない環境こそが問題である。自殺対策で、不登校を減さなければならないという意見は論点をすり替えているとしか考えられない。

ある学校に行っていない子どもが、不登校、不登校と言われることで傷つくと言っていた。もう問題行動ではないので、2016 年から 8 年が経過した今、不登校という言葉は死語にすべきである。

「こどもまんなか」を問う 8

県内各市町にひきこもり地域支援センター設置を望む

現在 15 歳から 64 歳までで 146 万人のひきこもつている方がいらっしゃるという実態調査を内閣府は発表しています。国はひきこもりに精神疾患領域だけでなく幅広い領域での支援体制を整えようとしています。

8050 問題は喫緊の課題であり、女性のひきこもりの顕在化や若い世代のひきこもりもコロナ以降増加しています。

ここで相談体制の整備を求めます。各地元にひきこもり地域支援センターを設置して相談できる体制を整えて、ややもすると相談に行きづらいひきこもっている方々が相談しやすい環境を作っていくことが必須だと考えています。

ひきこもり状態にある本人やご家族は相談機関に相談するということ自体が、今後の生活に向けた第一歩であり、支援につながった事を労り、最大限の敬意を表して、相談に来た人自身を支援することや相談者が求める具体的な支援等をすぐに実現できない場合であっても、緩やかなつながりや関わりを待ち続ける対応が求められています。

国はひきこもりは社会モデルだと考えるようになりました。ひきこもりを個人の問題ではなく、社会がひきこもりを生み出したということであり、ひきこもりを構成員と受け入れる社会を作っていこうということです。

彼らはやむを得なくひきこもつているのであり、彼らが安心して過ごせる社会を作っていくことがこれからの共生社会の姿だと思います。

そのために各市町にひきこもり地域支援センターを是非設置していただきたく願っています。

「こどもまんなか」を問う 9

つながる・つながりの原点

　ひきこもりの息子娘を持つ家族はどのようにしていけばいいのか。

　当然まずは息子娘が生きていけるように、または自立できるようにあきらめずに努力しています。そのために親も一緒になって考え勉強して彼らの思いを共有できるようにしていく、相談機関に相談する、家族会に参加してみることも大切だと思います。

　次は、彼らが抱える生きづらさを代わりに相談機関や医療機関に伝えるということだと思います。必要な支援を受けるために。

また、同じ思いをしている方々に自分の経験がお役に立てればと思う方もいらっしゃるわけです。
いつまでこの状況が続くのか不安を感じながら多くの年数が経過しています。
ここで、彼らは子どもの時学校で毎日いじめられ、不登校になり苦しんだ日々を忘れられません。子どもの頃のいじめ体験は本当にどうしようもなく、それが重なって人と会うことに恐れを抱き、家から部屋から出ることができなくなっていきます。また自分を追い込み精神的に苦しくなり、二次症状として病んでしまいます。自分は生きていく価値がない、死んでしまいたいと思うほど苦しんでいきます。生きていく価値がない、死んでしまいたいとびっしり書かれた大学ノートを見たことがあります。それは子どもではあるが、本当に考えに考えて答えが見出せず、もがき苦しんできた実相です。ロープを探し、包丁を探し、薬を探し、ガス管を探し、高いところを探したくなる衝動に負けてしまいそうな正気を保つに限界な心境だったと思います。
トラウマとは圧倒された感覚を持ったときに生ずると言います。まさにそういう状態であっただろうと思います。私たち親も必死に彼らのその思いを軽減するべく時間を惜しんで寄り添ってきました。
この生死の限界に立って来られたのは、一方では今回の震災に遭遇された方々だと思います。
体験したことがない揺れ、自分で制御できない状態、倒壊する家屋、塀、落下する瓦、家の中のものが全て崩れ落ちる様子、土砂崩れ、津波、地割れ、液状化、火事、そんな中で身を守る余裕もないあっという間の残状。
まさしく生死の境界に立ち恐怖に慄いた時間だっただろうと思います。その後の全てを失っての避難生活も動転した心境での日々だったでしょう。
出来事の内容は全く異なりますが、生死の境界に立たされることで、いのちとは、生きることとはなどあらゆることを考えざるを得なかった、いのちの原点に立ちかえる共通する瞬間だったのではないでしょうか。
真実なつながりは、いのちの原点に立ち返った中で見出されるのではないかと考えています。またそのつながりこそ新たな社会の形成の基礎になると思います。いのちを最大限に尊重する社会、ありとあらゆる多様化する人々がつながる原点になるのではないでしょうか。
今まで私たちは家庭、社会、学校を行きづらいものにしてきました。私たちが持つ感覚や価値観は行きづらいものを作る方向にしか向いていなかったと言っても過言ではないと思います。それに気づいてきた人間こそ不登校でありひきこもつている人々であると考えています。彼らは決して間違っているのではなく、間違っているのは私たちの方であると私は思います。現代は自分優先で人のことまで考えない世の中になっています。お互いに配慮する考えがないところから行きづらくなっているのではないでしょうか。
彼らが感じたこと、思ったことは正しかったのです。それを否定してきた故に精神的に病んだり、二次被害に追いやったのが真相ではないかと考えています。

「こどもまんなか」を問う 10

夏休み明けを迎える君に
生きづらさを抱える君たちに伝えたいことがあります。
あなたが生きづらさを抱えるようになったのは、あなたに原因があるのではなく、あなたを取り巻く社会に問題があるからです。
あなたが考えてきたこと、感じてきたことは間違っていないのです。どうしてそう思うかと言うと、あなたのこころが純粋で汚れていないからです。
たとえば、大人たちあるいは学校や教室はこのままでいいのかと思ったことがあったでしょう。そう考えたあなたは正しかったのです。
あなたが声をあげていける環境になっていないし、あなたの声を受け止める環境になっていないのです。
わたしたち大人はあなたと同じ人間であり、上から目線で見たり注意したりすることはおかしいのです。あなたを守ってくれる人々がかならずいます。あきらめないでください。